

乙女の祈り

ピアノ：宮沢明子

- SIDE 1** 1. 乙女の祈り (パダジェフスカ)
LA PRIERE D'UNE VIERGE (T. Badarzewska)
- SIDE 2** 1. 夜想曲 作品9の2「愛情物語」(ショパン)
NOCTURNE OP.9-2 (F. Chopin)
2. 入江のざわめき (アルベニス)
RUMORES DE LA CALETA (I. Albeniz)
3. マラゲーニャ (アルベニス)
MALAGUEÑA (I. Albeniz)
4. 楽興の時 第3番 (シューベルト)
MOMENT MUSICAL OP.94-3 (F. Schubert)
- SIDE 3** 1. エリーゼのために (ベートーヴェン)
FÜR ELISE (L. Beethoven)
2. トルコ行進曲 (モーツァルト)
RONDO ALLA TURCA (W.A. Mozart)
3. ワルツ 嬰ハ短調 (ショパン)
WALTZ OP.64-2 (F. Chopin)
4. トロイメライ (シューマン)
TRÄUMEREI (R. Schumann)
- SIDE 4** 1. 愛の夢 (リスト)
LIEBESTRAUM (F. Liszt)
2. 小犬のワルツ (ショパン)
WALTZ OP.64-1 (Valse du petit Chien) (F. Chopin)
3. 月の光 (ドビュッシー)
CLAIR DE LUNE (C. Debussy)



制作にあたって

「マニアを追い越せ」大作戦もこの度、10周年を迎えさせていたことができました。これも一顧にDAM会員の皆様の暖かい御支援の賜物と、心からお礼申し上げます。

カートリッジの性能や音質のチェック用にと、企画を始めたDAM45・オーディオ・チェック・レコード・シリーズも今回で35及び36種類目ですが、常に「良い音楽を、良い演奏で、そして良い音でお贈りする」というポリシーで制作しております。

その内、今回で15種類を数えるDAMオリジナル録音中、クラシック音楽の分野では、ギター、合唱、吹奏楽、室内オーケストラ（チェンバロ、尺八を含む）、そして大編成のオーケストラを2回収録しましたが、今回はピアノを取り上げてみました。

誰でも知っているピアノの小品を一流の演奏家にお願するという事は、大変難しく、今まで仲々実現できませんでした。今回、「マニアを追い越せ」大作戦の10周年を記念して、世界の音楽界で活躍中の宮沢明子さんの素晴らしい演奏によって、皆様にお届けできることになりました。

宮沢明子さんといえば、かつて「ピアノとの対話」やオーディオ・ラボ・レーベルの一連のシリーズで、音楽ファンはもとより、オーディオ・マニアの方々にも良く知られている日本を代表するピアニストです。

今回、東芝EMI(株)と専属契約を結ばれ、市販レコード（「宮沢明子/ショパン・リサイタル」TA-72118）のレコーディングをする機会に、なんとかDAM45のレコーディングをお願いしたいということで、宮沢さんと東芝EMI(株)の御好意により、DAMのためにスケジュールをさいていただいて実現したものです。

クラシックの最新録音というと、このところ殆んどがデジタル録音ばかりになってしまいましたが、DAMの経験では、現時点において、まだまだアナログ録音

の方が総合的な音質について優れている点が多いといわざるを得ません。そこでピアノ名曲集の決定盤を作るにあたり、更にアナログ録音の限界に挑戦するため、通常の2倍巾の5インチ・76cm/sec 2チャンネル・テープレコーダーを使用しております。（なお念のため、デジタルでも収録いたしました。）

良いホールで録音したいというDAMの希望により、演奏者、ミキサーともに満足できるホールとして、これからおとしで、宮沢さんが初演奏をした茅ヶ崎市民文化会館が選ばれました。

3月14日の録音当日は、折から雪となってしまうましたが、録音本番では、ノイズを避けるため暖房も止めざるを得ませんでした。そんな厳しい条件の中で、情熱的な演奏がくり広げられ、宮沢さんのこれら小品を数多く弾き込んでこられた実力と、プロに徹したレコーディングぶりにスタッフ一同、頭の下がる思いでした。

とにかくピアノ小品集というと、曲目が全てで、演奏・録音は二の次という例を見受けますが、本アルバムは、知らない曲は無いというくらいに親しみ易い名曲ばかりを網羅しているばかりでなく、コンサート・ピアニストとして豊富なキャリアと実力、そして子供達のピアノ教育にも大変熱心な宮沢明子さんのピアノに対する愛情があふれた、感動的な名演といえるでしょう。

更に加えて、過去DAM45のクラシック・オリジナル録音を全て手がけていただいている、ミキサー・池田氏の技術と見識によりその名演があまるところなく収録されています。

この素晴らしい名演、各録音を、一曲残さず、かつマスター・テープの音をそのまま会員の皆様にお聴きいただきたい、という気持から、10周年記念特別2枚組として制作した次第です。

カッティングにあたって、録音当日のオリジナル・マスター・テープを、一部の曲で若干の編集作業をし

ただで、音そのものについては、一切いじっておりません。又、録音時に使用した、テープレコーダーをそのままカッティング時の送り出しにも使用するという、理想的な形で、ハイ・レベル、ノン・イコライザー、ノン・リミッターで、ストレート・カッティングしております。

特に「乙女の祈り」はダイナミックレンジが広いので、一面に6'05"のジャンボ・シングル仕様とし、又、内周歪を避けるため、なるべく内側に入らないようカッティングいたしました。その他、各面とも10分から13分強という、ピアノ小品集としては、例をみない贅沢なカッティングと、その後の製造工程でも、DAM45ならではの東芝EMI(株)の数々のノウハウを駆使してアルバムを完成いたしました。

オーディオ・チェック・ポイントとしては、スタインウェイの豊かな響と輝き、そして広大なダイナミックレンジが安定かつリアルに再現できるかどうか。又、宮沢さんの、曲による微妙なタッチの差異、時間経過によるピアノの音色変化、ピアノ特有の演奏ノイズ等が聴き分けられるかどうかチェック・ポイントの一つといえるでしょう。

このピアノ名曲集を心ゆくまでお楽しみください。そして皆様のライブラリーの中に加えていただければ幸いです。

なお、10周年記念アルバム制作にあたり、宮沢明子さんをはじめ、関係の方々、そして東芝EMI(株)にはいつもに増して多大な御協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。

今後DAMといたしましても、アナログ、デジタルを問わず、より良い音楽ソフトを開発し、会員の皆様に少しでもお役にたてるよう、更に一層の努力をする所存です。今後とも皆様の御支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

DAM推進委員会

時間さえとまってしまったかのような、夏の昼さがり。うだる暑さの中、お屋敷町を歩きます。深い庭木の繁みから、蟬の声。強い陽射しと樹陰、光と影の交錯に、少年はふと、永遠を予感さえて、めまいさえ覚えてしまったり。角をひとつ曲がると、どこからかかすかに、ピアノのつま弾きが聴こえてきたりするわけですね。この場合、暑苦しいベートーヴェン：ピアノ・ソナタなぞであって、断じて、ならない。やはり、「乙女の祈り」「トロイメライ」といったような、かそけき小品であって欲しいものです。歩を進めれば次第に音は近くなり、やがてとある一軒。からたち、金木犀の緑濃い植込みの奥、時経た洋館の中から、どうやら聴こえてくるらしいのね。となればピアノを弾くのは、少女、それもすき透るように白い肌の美少女、に決まっています。華奢で腺病質で病弱で、森の奥の人知れぬ沼のような深い瞳の、夢見る少女。そのロウ細工にも似た指で、ショパンしちゃうわけですね。白い道に立ちつくしたまま少年は、麦藁帽子の下にキラキラ光る額の汗を拭きもやらで、見もやらぬ少女に想いを寄せ、大人の入り口に立ったときめきと、そしてとまどいにも似た不安で、やるせなくなってしまうのです。コレね、体験ではありません。が、ほら、このレコードに入っている小品の数々って、そんなイメージがありますよね。いってみれば、夏の日々への想いが結晶したような小品たち。聴きかえしながら、ずいぶんと遠くまで来てしまったものだな、と、つくづく思ってしまうのです。実際、昔語りをすれば、ぼくたちが小学生だった頃、クラスに1人か2人、ピアノを弾く子がいましたよね。勉強も良く出来て、先生のお気に入り、いいとこのお嬢さんらしくこぎざばりとしたワンピースなんか着て。そして、なにより、きれいでした。フツーに好意を寄せてる子に対しては、髪の毛ひっぱったり消しゴムちぎって投げたりしてコンタクトとるんだけれど（異性に魅かれる自分の中の部分一つのが気恥かしくて、その気持ちを正攻法で内部処理する行動パターンが未だつかめていないものだから、好意が逆の形で発露するわけね）、ところが、ピアノのお嬢様、彼女となると、もう、気品と優雅さで超越してしまっていてね。子供心にも、こりゃ世界が違う、と漠然のうちに感ずるのです。放課後ゴムとびやら珠算塾の世界じゃないよ。ピアノ・レッスンと家庭教師の世界なのだ。寝ころがって、せんべい盛りながら「快傑ハリマオ」見てるのと、もう、根本的に違うんですね。髪の毛ひっぱりでもしようものなら、指が腐ってしまうような、遥かに遠い美少女でありました。今はもう、そんな少女たち、いなくなってしまうみたいなのであります。国民総生産 GNP がグワッと上がり、国民は全員、中流になった。子供の教育も、ちょっとは考える余裕がでてる。女の子だから楽器でもやらせようかしら、なんてね。ママにそう持ちかけられれば、パパはもう、「ピアノの美少女」への憧れをトラウマのように持ってますから、「ウム、いいじゃないか」って具合ですね。でもピアノ、にはならないのね、これが。ピアノを買うんだったらエレクトーン、お、これは登録商標®だから、言い換えて電子オルガン。そのほうがいいに決まってる。ほぼ同じ位の値段で、音色がいっぱい出るし、リズムも出る。チャーシューメンと五目ソパ的に違う。この五目的多彩さが、ミドル・クラスにとってはたまらないんですわ。加えて、ヘッドフォンを使えば2DKでも夜までひける、教室も組織化されて授業料は安い——とくれば、これはもう、勝負は明らかですね。小学生の女の子は、今や、ことごとくエレクトーン、その電気楽器をやってるわけで、「ある愛の詩」なんぞ弾いちゃう時代となっていました。ぼくたちは、「永遠の美少女」に憧れて、大きくなってきた。ここまでの時代、少女たちが指1本でイージーに「マイ・ウェイ」を弾いてしまう情況（象徴的に言ってるんです）を考えれば、今、憧れが見出せない時代になってしまったような気がします。「乙女の祈り」「エリーゼのために」といったピアノ入門者用のかそけき小品も、あと20年もしないうちに消えてしまうのではないのか。このレコードを聴きながら、ふとそんなことを思い、遠い夏の日々

への追憶にも似て、やるせなくなってしまうのです。

このレコードでピアノを弾くのは、宮沢明子さん。日本とベルギーをフィールドにして活躍する一級のピアニスト。コンサート活動はもとより、後進への教育に力を注いでいる人です。だから、ここへ収められた曲目、ピアノに親しもうとする人が必ず通過するこうした曲目は、もう何千回と自分で弾いて、また生徒さんが弾くのを聴いてることでしょうね。フツーさ、なににせよ、やりすぎると飽きてくる。ところがこの演奏を聴けば、どの曲も初めて作られ、初めて演奏されたような瑞々しさにあふれています。僅かな間のとりかた、心が揺れるようなテンポのたゆたい。小さい曲のすみずみまで、気持ちを寄り添わせ、心配りに満ちて、美しく感動に満ちています。こうした演奏家だからこそ、ピアノ教育にも力を注げるのだと思えるのです。

曲はいずれも、ピアノを習ったことのない人もなじみ深い小品の数ばかり。主義主張を盛り込み精魂こめて心血をそそいだ凄惨な作品、などでは全然ありません。大作・力作の合間、息抜きに作ったような、くつろぎに満ちた音楽です。材料が良ければ、あまりいじくらずに素材を生かした料理の方がおいしいでしょ。あれです。力作では感じられない大作曲家の素顔、新鮮な魅力が愉しい、そんな小品を集めました。

●第1面

乙女の祈り

作曲者テクラ・バダジェフスカ(1838-1861)はポーランドの女性。作曲家としてよりもピアニストとして活躍した人のようで、作品は彼女が18歳の時に作ったこの1曲のみがあまりにも有名です。強い音で下降する前奏から、典雅に花開くような主題が始まり、変奏が続きます。

●第2面

夜想曲 第2番 変ホ長調 作品9-2

フレデリック・ショパン(1810-1849)の作った21曲の夜想曲中、最も有名な1曲。ショパンはフランス人、ポーランド人の両親のもとに生まれ、4歳からピアノを習って、小さい頃から神童と呼ばれました。作品もピアノのためのものが多く、いずれも華やかなリリシズムにあふれています。

ゆったりとたゆたうように、またすべるように曲は続き、右手のトリルと、短かいこだまを響かせて終わります。

入江のざわめき

カタロニア(スペイン)の作曲家イサーク・アルベニス(1860-1909)は、スペインの風土と精神を生かした小品をたくさん作りましたが、この曲もそうした中の1曲で、ピアノ曲集「旅の思い出」に含まれています。

地中海の港町マラガの民謡を想わせる旋律。

マラゲーニャ

同じくアルベニスの作品、ピアノ曲集「スペイン、アルバム」の6巻の1曲。

もともと「マラゲーニャ」は南スペイン地方の踊り歌のことですが、アルベニスはそれを独自に様式化しました。活発でエキゾチックなリズムの舞曲にはじまり、遥かに想いをほせるような美しい中間部をはさんで、再び舞曲となります。

楽興の時 第3番 作品94-3

フランツ・シューベルト(1797-1828)は「未完成交響曲」で有名なドイツの作曲家ですが、本領は「冬の旅」をはじめとする歌曲のかすかと、多くのピアノのための作品です。

6曲からなる「楽興(音楽、としてもいいでしょう)の時」の中で

最も親しまれる第3番は、長調と短調の交替が、ふと陽がかげり、また射してくるような感じを与えて、印象に残ります。

●第3面

エリーゼのために

あのルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)が40歳の時に作ったなんてちょっと信じられないくらい、かわいい愛らしい作品です。

当時、彼はテレゼ・マルファッティという女性に愛を寄せており、曲の名はその名前を出版社が読み間違えたのでは、という説があります。主題が2つのエピソードをはさむ(A・B・A・C・A)形式の曲。

トルコ行進曲

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)は40年たらずの人生を通じて、独奏曲からオペラまでの広い分野に多くの曲を作りました。

ピアノ・ソナタ第11番イ長調の第3楽章がこの「トルコ行進曲」で、当時はやっていたトルコ音楽に着想を得て作られました。

ワルツ 第7番 嬰ハ短調 作品64-2

ワルツは円舞曲と訳される、19世紀ヨーロッパではやった舞曲の形式。ショパンのこの作品はワルツというものの、ポーランドの舞曲マズルカに近いアクセントを持っています。

1846-47年にかけて作られたもので、ためらいがちに曲は始まり、次第に華やかさを増す3部形式で作られています。

トロイメライ

ローベルト・シューマンはショパンと同じ1810年、ドイツに生まれた作曲家ですが、精神に異常をきたし、不幸な後半生をおくりました(1856年歿)。

彼が28歳の時に作ったピアノ曲集「子供の情景」は、子供の気持ちになって作ったロマンティックな小品集。第7曲「トロイメライ」は、まどろむように美しい音楽です。

●第4面

愛の夢 第3番

「交響詩」という形式を創り、また「ハンガリー狂詩曲」でよく知られるフランツ・リスト(1811-1886)は、数多くのピアノ曲を残しています(ハンガリー狂詩曲も原曲はピアノ曲)。

1850年、リストは3つの自作歌曲をピアノ独奏用に編曲、「愛の夢」と名づけました。その第3番は、F.フライリヒャートの詩による「愛しなさい、愛の続く限り」という原曲によるものです。

ワルツ 第6番 変ニ長調 作品64-1 「小犬」

「小犬のワルツ」と呼ばれて親しまれるこの曲は、さきの第7番とはほぼ同時期に作られたもの。犬が自分のしっぽを追ってくる廻るさまを見てこの曲を作ったというエピソードが伝わっています。こまかく廻るような音形が高く低く続きます。中間部にゆっくりした部分をはさむ3部形式の短い曲。

月の光

クロード・ドビュッシー(1862-1918)はフランス近代の作曲家。「印象主義」を音楽で表現して、後に続く作曲家に大きな影響を与えました。その「印象主義」の第1歩ともいえるこの曲は、「ベルカマスケ組曲」の1曲として、1890年に作られたもの。ヴェルレーヌの詩「月の光」に着想を得たともいわれ、夢見るような響きは、湖水に写る月の光を想わせます。

乙女の祈り ピアノ：宮沢明子

- | | | |
|--------|-------------------------------------|-------|
| [1] 1. | 乙女の祈り(パダジェフスカ)..... | 6'05" |
| | LA PRIERE D'UNE VIERGE | |
| [2] 1. | 夜想曲 作品9の2「愛情物語」(ショパン)..... | 4'43" |
| | NOCTURNE OP.9-2 | |
| | 2. 入江のざわめき(アルベニス)..... | 3'42" |
| | RUMORES DE LA CALETA | |
| | 3. マラゲーニャ(アルベニス)..... | 3'03" |
| | MALAGUENA | |
| | 4. 楽興の時 第3番(シューベルト)..... | 1'53" |
| | MOMENT MUSICAL OP.94-3 | |
| [3] 1. | エリーゼのために(ベートーヴェン)..... | 2'34" |
| | FÜR ELISE | |
| | 2. トルコ行進曲(モーツァルト)..... | 3'33" |
| | RONDO ALLA TURCA | |
| | 3. ワルツ 嬰ハ短調(ショパン)..... | 3'09" |
| | WALTZ OP.64-2 | |
| | 4. トロイメライ(シューマン)..... | 2'52" |
| | TRÄUMEREI | |
| [4] 1. | 愛の夢(リスト)..... | 4'33" |
| | LIEBESTRAUM | |
| | 2. 小犬のワルツ(ショパン)..... | 1'33" |
| | WALTZ OP.64-1(Valse du petit Chien) | |
| | 3. 月の光(ドビュッシー)..... | 4'43" |
| | CLAIR DE LUNE | |

MEIKO MIYAZAWA



INTERVIEW

(聞き手)伊藤玲子ディレクター



伊藤 今日はどうもお疲れさまでした。

宮沢 どうもありがとうございました。

伊藤 とってもいい録音でほんとうにうれしくなっちゃう。

宮沢 とても楽しかったです。(ウフフ……)

伊藤 ところで、貴女にお聞きしたい事があるの。
答えて下さいね。

宮沢 ハイ。

伊藤 ピアノを始めたのはいつから?

宮沢 世間では2歳8ヶ月という事になっていますから、
そうしましょう。でももっと前です。

伊藤 お腹の中にいたときからなのね。

宮沢 そう、母がピアニストでしたから。

伊藤 ピアノの魅力、つまり楽器としてのピアノの魅力
は何?

宮沢 私、もう一度この世に生まれ直しても「ピアニス
トになる」って言うでしょうね。だってピアノっ
て鍵盤の88鍵が全部生きてますからね。それにひ
じょうにデリケートな楽器で、自分が心こめれば
答えてくれるし……。ほんとにいつも一音一音大
切にしたいという気持をわかせる楽器ですもの。

伊藤 ではピアノ音楽の魅力、つまり好きな曲、得意な
曲、又は好きな作曲家などについて?

宮沢 私はね、とにかく「B」が好きなんです。バッハ、
ベートーヴェン、ブラームス。でも私自身、自分
の個性がすごく生きて、それで人にできないって
言うとおかしいですが、私の今一番得意なのは装
飾音なのね、それで、スカルラッティとかバッハ
とかモーツァルトとか結局そんなところになるか
な。でも私はショパンも好きだし、フランス近代、
スペイン音楽、シューマンも大好き、だから「私
の得意なものは?」って言う事はあまり好きじゃ
ないのネ。

伊藤 ウーン、とにかくピアノ音楽全て
が好きって言うことネ。

宮沢 そうね。

伊藤 次に、最近、目標としている事を
話して下さい。

宮沢 まずはピアノに向って姿勢を正
す。指の姿勢、心の姿勢。

伊藤 今後やっていきたいと思っている
事は。

宮沢 やっぱり、いいレコーディングを
続けたいという事。それにはホー
ルと楽器を選びたいです。自分が
せつかく一所懸命弾いているのに
限界を感じる様な楽器では演奏家
として非常にさびしいですからね。

それに私が「必ずこの人と組みたい」という音の
パートナー、つまり世間で言う調律師、そしてレ
コーディング・エンジニア。このトリオは主張し
て行きたいです。

伊藤 今迄の印象に残る活動を話して下さい。個人的で
なく仕事の上での……。

宮沢 全集を録音したって言う事は大きいですね。あれ
は1965年、ずいぶん前になりますが、ハイドンの
ピアノ・ソナタ62曲全部録音した。これは世界で
初めてです。それからモーツァルトのソナタも全
部。この2つは大きい。それからスカルラッティ
だけのリサイタルを録音した事も大きいワ。

伊藤 そうね。ところで今迄いろんな録音なさったけれ
ども、録音されたレコードどれくらいありますか。

宮沢 72枚をさよならして73枚目で東芝の専属になりま
したから……。スカルラッティのアルバムが73枚
目、カバレフスキーの子供のアルバムで74枚目、
こんど発売されるショパンで75枚目、進行中のパ
ッハで76枚目、これにコンパクト(ディスク)が
あるし、名曲シリーズ(発売予定で録音進行中)
があるし……。

伊藤 だんだん、手足がたりなくなって来たわネ。
ところで、その録音されたレコードの中で特に気
にいったものってあるの?

宮沢 1にも2にもスカルラッティのアルバム。これは
誰が何って言っても、生まれてはじめて「どうだ
った?」っていう人の意見を聞かなくてもすむ。
いいかえれば、自分がこの瞬間っていうものを素
直に発揮できたと思うの。それに音のバランスも
よかったし、録音状況もよかった。そういう点で
スカルラッティ、それから私はこんどのショパン
のアルバムが気に入っているの。

伊藤 今迄、音楽の話題でしたが、話題を変えてっと!!
もっとも得意な事……って事は貴女の趣味ってな
ーに?

宮沢 (即座に) 食べること!!

伊藤 出てくると思った。で、好きな食べ物ってなーに?

宮沢 ようするに、おいしいものは全部好き。もう手抜
きの食事ぐらいいいやなものはない。
それから、高くてまずかった時はお金を返しても
らいたいワ。

伊藤 ホント、ホント。(笑い)

宮沢 演奏も同じですけどネ。(笑い)

伊藤 今日の演奏会代返せ!!って。(笑い)

宮沢 テイク何とか分お返ししなきゃ、なんて言ったり
してね。(笑い)

伊藤 単純な質問だけど、好きな色は?

宮沢 真っ赤と真っ黒、それにゴールド。

伊藤 いかにもそれは性格そのままをよくあらわしてい
るわね。(笑い)

花は何の花が好き?

宮沢 真っ赤なバラが好き。

伊藤 だからスペイン音楽素敵ですネ。今度ぜひ、スベ
イン音楽に取組んでみたい。

宮沢 そうですね。

伊藤 最後に。ベルギーと日本とをずいぶん往復して活
動していらっしゃるけど、だいたいどれ位の比率
なの?

宮沢 それは日本での活動をできるだけ多くしています
が、1984年からはヨーロッパへ行くのがものすご
く多くなりそう。

伊藤 でもいいわ、国際的にジャンジャンと(活動する
事は)。

宮沢 耳をからにすることも大切です。

それから、「私っていう人間がどんな国に生まれて、
どんな歴史を持っているんだろう」という興味で
外国人は来るわけでしょ。そういう人前で演奏
するのも大事ななと思ったりして、別に日本人だ
からという事は関係ないけれど。

伊藤 そうね、つまり、そういう人間的な色っていうも
のを全くなくして、ほんとにインターナショナル
なピアニストになるっていう事ね。

宮沢 なりたいと思っています。

伊藤 そうなる事がもう目の前に見えていますね。

こちらは大いに期待していますよ。

宮沢 ハイ。

伊藤 今日はどうもありがとうございました。
お疲れさまでした。

宮沢 ありがとうございました。

MEIKO MIYAZAWA

明子さんのこと

明子さんのお付き合いは、よくよく考えてみますと、まだ二年にも満たない月日です。けれども、もう、ずっとずっと大むかしから仲良しであったような気がします。それは、彼女の人間そのものが親近感溢れる暖かさに満ち満ちていること。そして、笑うときも、涙するときも、怒るときも本音であること。よそゆきのおすましが苦手で、いつも普段着ありのまゝであること。

食べることが大好きで、そのことをとても大切にすること。大きな声で、とてもないしょ話など出来ない人であること。自分を大事にすると同じように、それぞれの人間を大事に、つまり「人の和」を大事にすること。自己主張をはっきり持っていること。エネルギーに行動すること。とにかく、なんといっても、「ピアノ」が大好きなこと。そして音一つ一つをこよなく愛し、心血をそそいでピアノに向かっている。そんな明子さんが、わたしは好きなのです。

これらのことどもをあやなして、彼女の音楽が生まれてくるのです。そして、彼女の音楽は「生きて」います。心の奥深く語りかけてくるのです。

そんな明子さんとのピアノを通しての語らいが、わたしは好きなのです。

伊藤玲子(ディレクター)

追記

彼女のレコードを是非聴いて下さい。

[TA-72107]

宮沢明子/スカルラッティ・リサイタル

ソナタ：ニ短調L.108/ホ長調L.430/ニ短調L.413

ロ短調L.449/ホ長調L.23/イ長調L.483

イ短調L.136/ヘ長調L.384/ハ短調L.352

ニ短調L.366/全10曲

[TA-72108]

宮沢明子/カバレフスキー こどものためのアルバム

こどものための30のピアノ小曲集 作品27/他

[TA-72118]

宮沢明子/ショパン・リサイタル Vol. 1

夜想曲 変ロ短調 作品9の1/夜想曲 変ホ長調 作品9の2

マズルカ イ短調 作品17の4/バラード第3番 変イ長調 作品47

夜想曲 嬰ハ短調(遺作)/夜想曲 ハ短調(遺作)

マズルカ イ短調 作品68の2/バラード第4番 ヘ短調 作品52



略歴

教会でオルガンをひく祖母からピアニストだった母に才能が受けつがれ、すでに2才8ヶ月から母のひざでピアノをひき始める。

音楽好きの一家に育ち、神奈川県逗子で幼少時代をすごす。ユニークな個性と才能がのびされ、小学校5年より桐朋学園「子供の為の音楽教室」入室。中学1年より東京に移住する。中学3年の時全日本学生音楽コンクール(毎日新聞社、NHK主催)で全国第1位及び文部大臣賞受賞。桐朋学園音楽科に入学し研鑽を積む。

1961年渡米、エール大学音楽部、ジュリアード音楽院で学ぶ。

1961年渡欧。同年10月ジュネーブ国際コンクールに1位なしの2位入賞。1964年1月ニューヨークにて故ケネディ大統領追悼演奏会のソリストに選ばれる。同年9月イタリアヴィオッティ国際コンクールピアノ部門金賞第1席受賞。そしてヨーロッパのキャリアがスタートされる。

1965年3月日比谷公会堂で帰国後初のリサイタルを行う。以後ヨーロッパはもとより、日本全国(稚内から宮古島まで)くまなく演奏活動を行い今日に至っている。そしてレコーディング活動とレコードの枚数は世界でも屈指の存在といえよう。

1978年10月から79年3月までNHK教育テレビ「ピアノのおけいこ」ですばらしい指導ぶりが圧倒的人気を博した。

1980年9月、初のエッセイ集「ピアニストの休日」を出版(大和書房)、すでに版を重ねること11版、好評発売中である。

1982年6月4日には第4回国際被害者学会シンポジウム日本大会協賛チャリティコンサートを開き成功裡に終る。

心からピアノを愛し、努力と厳しい修業を続ける彼女に対し温かく声援を送るファンは全国に広がっている。1983年2月東芝EMIと専属契約を結び第1枚目として「スカルラッティ リサイタル」が5月に発売され、2枚目として「カバレフスキー こどものためのアルバム」が9月に発売された。

執念さえあればよい音を得られるか……

DAMオリジナル・レコードを手にする度に音楽とオーディオにいろいろと思い巡らすことになる。いったいどうしてだろう。私の若い頃はレコードというと必ずといってよいほど、遠い、外国で高名な演奏家によってである。この距離差が大きいほど有難いというレコードの価値観につながっていたように思う。ところが、今日は外国自体が近くなったし、国内でどんどん録音が行なわれる。音楽もレコードも身近かな事からで、自分の考えや体験を通じて実感できるような時代なのである。この1セットのレコードも私の音楽と音体験に強烈なインパクトを与えたものだ。

まず、宮沢明子さんである。

ディスコグラフの多い点では第一級である。もう何年前のことだが、このピアニストの録音をのぞいたことがある。調整室で演奏の進行を『うまくいったほしいな』と願うような気分で聴いていた。演奏会とは違って多分に機械組立式のつらい作業が終って皆がほっとした。宮沢さんの録音スタッフへのねぎらいの言葉と一緒に部外者の私にも『私の演奏を応援してくれてアリガトウ』と声をかけてくれた。仕事の邪魔になってはと隅の方にいたのだが、どうもこの人は聴衆に向けたアンテナの感度が高い人だなとその時思ったのである。とかく冷たくなりがちな録音という作業だけに、聴衆の気分で音楽を聞きとっていた私の心持ちを感じとっていたのだと思っている。

私ばかりでなく、多くの人達が口にしたたり、評価したりすることだが、日本のピアニストで『あの人だ！』と特定出来る演奏スタイルを持っている人は宮沢明子だけだといわれている。こう書くと、その中味は良い方と悪い方の両方になってしまう。が、私はピアノ演奏を自ら志しているわけではないから教科書的な模範演奏など少しも期待していない。さりとお説教的で強圧的、丁寧すぎるのも困るのである。その点、宮沢明子の音楽は私にとってはたいへん理解のし易い音楽の言葉遣に聞えてくる。変な喩えになるが、私は日本語の東北の訛りが耳に心地よく感じることもある。意味が取れなくてもそう感じる。宮沢明子の音楽の響きのなかには、そうした近くで、それで遠いところのことばの魅力というのが好きなのだ。

さて、このDAMオリジナル・レコードの宮沢明子の音楽であるが、私が心づもりしていた音楽と違う。いつもよりはっきりと、言葉遣、一言一句がまぎらわしい発言でな

くきれいに響いて来るように聞える。それを音楽美学的に言えばもっと他のいい方もあるのだろうが、私には言葉の意味が聞きとれたうえで心地よい余韻が残るといえるのだ。

生演奏に接したならばそんな話も解らないではないが、ただかレコードを聴いただけでよくそんなことがいえるな！ちょっと大げさではなからうか。こんな風に考える人もあるかもしれない。私もかつてはレコードというものは技術的限界があつてとても現実の音楽に接するような具合にはゆかぬと考えていたのである。たしかに交響楽のような大きなスケールの展開では困難があることはたしかだ。が、室内楽の状況、とくにステージと客席の心持ちが接するような場所の音楽は物理的にも正確に収録される可能性が高いと思うのである。

ところで、こうした音楽の収録する技術水準が高まったからといって、高級な録音装置を駆使すれば、物理的に正確に記録が出来るかという現実はその逆である。今日でも、20年前のステレオ録音は音楽の内容の高さの評価と一緒に技術的な処理法のよさとしても多くのレコードが残っている。高度技術手法ばかりが解決でないことを表わしている事からだ。

音楽には演奏家と聴衆が必要であるといういい方からすると、レコード音楽には演奏家と製作スタッフのアンサンブルが最も重要である。私は今でもSPレコードを聞くと、ピアノ音楽ではアルフレッド・コルトーがレコード製作に最も優れたスタッフを持っていたと信じている。録音処理はいつも安定している。その使われているピアノの調律、整音もふくめていつも安心して聴いていられる響きである。コルトーがレコード製作者からいつも尊敬され、大切にされていたことの結果であろう。

こんな見方からすると現代のレコードは完全な商品であつて、演奏家は二の次になってしまったと思わざるを得ない現象にしょっちゅう出くわす。

ところでこのDAMレコードは表面的なとらえ方をすれば、商業主義のなかで最も安易に扱れて仕方のない分野になる。ところが実はこれがまったく逆で、DAMレコードの企画者と東芝EMIが慎重に考え、製作したレコードであることを知ったのである。厚盤レコードであること、45回転盤であり、マスターテープを76cm/secのものを極力選んでいるという点からも厳しい求め方をされているという

ことがわかる。とりわけこのセットのようにDAMオリジナル・レコードとなると製作スタッフの顔付きの引き締り具合がまるで違って来るのである。東芝EMIとしては、限定された予算のなかでよい仕事を仕上げねばならぬという一面の厳しさのためかも知れぬ。DAM側はそれ以上に、オリジナル製作であるからには本家の本来的な仕上り以上のものを求める真剣さを感じられる。録音現場を見たわけでもない私がどうしてそんなことを感じるのだろうか。まず、今どきコマーシャル・ベースでは考えられない1/2インチ、76cm/sec速行のアナログ録音で行なったことでもいえる。東芝EMIという大きな組織のなかで、悪い言い方をすれば古い実験のくり返しといわれても仕方のないような手段をとったということは、いくらDAMのためとはいえ破天荒のことだと思う。今や時流はデジタル処理で済ますのがヨーロッパでも常識という時代なのである。このレコードを手にして受けた宮沢明子の音楽と同時に、その音楽の共同作業の製作スタッフの強烈なまでの音に対する執念を知ったのである。

前にも話をしたSPレコードのコルトーの演奏には、いつも繊細な情緒と鋭い気迫に恐れ入っている。これも旧い容器に最近の技術を加えて得られることだが、最近さらに驚くべき体験をもった。トーマス・エジソンの発明になるブルー・アンペローラーという蓄音機である。これは今世紀初頭に普及した比較的ポピュラーな蓄音機であるが、発明当初の蠟管形式の改良を重ねたハードとソフトである。もちろん、録音、再生ともにアコースティックである。意外に大きな音がするのに驚くのだが、さらに演奏会場のホールトーンが聞えて来る。これは初期の円盤録音には考えられなかったことをエジソンはとうにやっていたのである。残念ながらエジソンのソフトには気の利いた演奏がない。マーチ・バンドやダンス音楽が残されているが、その音のなかに演奏者のエクスペッションがきれいに入っている響きを聞くことが出来る。

エジソンはかつて録音機の原理を手のひらに感じる自分の声の振動と知ってその変化を錫管の上に移した。その動きは手のひらに感じた前後の機械的運動である。一方、エジソンの発明の後を追ったベルリーナは、生産性を考えて管でなく盤にしたのである。現在のレコードの源流である。ところがエジソンの縦振動ではなく、音波のエネルギーを

90度方向を変えた横波で処理した。音波の疎密をそのまま縦波で扱うか、横波で記録するかは、現在のような増巾という手段のない時期では方向転換の信号伝達の損失は大きいとみなければならない。それがホールトーンのような細かな音が聞えるか、演奏の気迫が感じられるかの差になって残っているのだと判断した。さらにいかに古いシステムであっても、その音響エネルギーの処理が適切ならば音情報は正確に残るものだと感じたのである。創始者トーマス・エジソンの超アナログ手法は、空間のエネルギーをいかに損失なく他の形に置き換えるかということだった。現代LPレコードも電氣的処理は加わったがこの原理には変りない。前述の1/2インチテープの記録法がつけ加わっても同じである。つまり、その再生ヘッドの出力に極めて能率の高いスピーカーを直接つけたとすると音はちゃんと出て来るのである。アコースティック・システムの変型として成り立つことはSP・LP・テープどれでも同じなのである。ということはアナログ・システムは音情報のパワーをふくめた伝送システムなのであることが判る。

一方、最近のデジタル方式は、情報そのものは符号化されているからそのもの自体はパワーを持っていない。ここがアナログとデジタルの大きな違いになっている。デジタル・オーディオが始まって2～3年は過ぎた。当初のハードの不備によっての音質の悪さは解消され、説得力のある歪の少ない音が聴けるようになった。その低音の力強さ、音のゆらぎの無さはアナログ記録では得られないよさである。ところが、音のよくなったデジタル・サウンドであるが、私には音楽がらみで聞くと、演奏家の気迫とか抑揚というダイナミズムに関した要素がアナログよりも下手に聞えるのである。音質のよし悪しを論ずると色調の現表と同じに受け手、聴き手で勝手ないい分が出て来る。しかし、音楽のダイナミズムは、音楽家の姿、かたちであり主張であると思う。初めに宮沢明子の個々の音楽の評価のしかたをしたのも、そうした音の動きの結果であると思うのだ。

DAMオリジナル録音が美しい音で記録できたということは、関係者の執念が実ったといえよう。それ以上に私は、デジタル録音とは一味違った現実感豊かな音楽の抑揚がとらえられていることがなよりの成功であり、後世の貴重な記録になっていると信ずるのである。

江川 三郎



“マニアを追い越せ！大作戦” 10周年記念

オーディオ・チェック・レコードとして企画された「DAM45」シリーズも、10年を迎えるに至ったことは、私共制作スタッフとして感無量であると共に、DAM推進委員の皆様のご御努力には頭が下がる思いと、感謝に堪えません。

このDAM45シリーズは、ディスク・レコードというきびしい物理的制約の中で、その一作毎に、より完成された音楽性の追求と、音の限界に挑戦し、トータル・サウンドの可能性を求めて来た経過があり、私共技術屋として、それを自負するものです。

シリーズの中で、企画される毎に、マスタリングからメッキ、プレスに至る製盤の新技術を導入し、そのたびに製造ノウハウを確立して来ました。45回転レコードを基本ホリシィーとして、ハイレベル・カッティング、ダイレクト・カッティング、マスター・プレス、ハーフ・カッティングは勿論の事、クォーツ・ロック・モーター、ダイヤモンド・ヒートスタイラス、又厚手重量のフラット・ディスクの採

用を一早く適応させ、最近では、ビデオ・ディスク、コンパクト・ディスクの周辺技術を導入し、よりハイディンシティ化に努めています。

一作毎に新技術を導入しテクニックを駆使して完成させるに、オリジナル・マスター・テープがダメになる程のカット・アンド・トライを行い、試聴室では山積にされたテスト盤のヒアリング、測定の繰り返しテストの連続！スタッフ間の口数が少なくなり、シラケる場面も数々有りました。しかし最高の状態で作成させた時の充実感とチャレンジした後の満足感を得た時の感激も又ひとしおです。この様にDAM45シリーズは、当社ソフト技術の流れを代表する重要なサンプルでもあります。

今後益々充実した内容で長く継続される事を願い、又音楽ファンの一人として、DAM推進委員の音楽に対する姿勢を多に讃辞してやみません。

東芝EMI音響技術部 原 清介

再生にあたって、カートリッジとアームの調整は念入りに行ってください（特に針圧は指定範囲内で、なるべく重い方を御使用ください。）カートリッジにとって極めて過酷なレコードとなっていますので、装置によっては歪が発生することがあるかも知れませんが、御了承のほどお願いいたします。

ピアノ録音の発想

ピアニストの意志による指からの打鍵で伝えられた、ハンマーの打弦によって出る、アタックの衝撃音と、それによってもたらされた弦の振動の響によって発音される。その他にピアノの音を構成するものとして、響板とそれ以外の弦を共鳴させることによって豊かなピアノの響となる。更にピアノを鳴らす場所・音場によって附加される響が増加されてピアノ全体の音となるのである。

録音する場合は、この四つの構成・アタック・弦の振動・響板・音場を頭で分解して、音として組立てなおしてゆくことが確実な録音方法と言えよう。しかし現実ではそれぞれの部分にマイクロフォンを設置するのではなく、例え一本のマイクロフォンでも、この要点を満足させることができるのである。

ここで大切なことは、ピアノ音楽に対する録音者のイメージが音を決定してしまうことである。一つの良いピアノ録音がピアノ音楽すべてに良いとは限らないことなのである。それはピアニストが変わると音色が変わると同様に、音楽の種類によって違って良いのである。録音と言う方法を借りた音楽的手段だと理解し、録音の限界をわきまえてピアノの音のイメージを創作せねばならない。

しかしながらピアノの音のイメージを追求するあまりに、ピアニストを忘れてはならない、音楽を表現するのはピアニストであり、ピアニストに録音のために負担をかけてはいけけないのである。ピアニストの意見を反映させるべきである。つまり、ピアノ録音の音が勝ってしまってはならない。録音された音が最初に主張されてはいけけない。音楽が素直に伝達されなければならない。

スタジオとホール録音

ピアノと言う楽器はそもそもスタジオに於いて発展したのではないことを考えれば、録音の立場からも相違点が明らかである。当然ながらホールの録音が正常であり、結果が良いのである。それはピアノの弦と全体の響が不自然でなく融合されているからである。高音弦の伸び、スケール感、奥行き、豊かな低音になっているのである。

スタジオ録音ではピアノの音を創造すると同様な作業をしなければならない。その正確な構築は、完全なモニターシステムを要求する難問題があるにもかかわらず、ピアニストの意志の動くままに、好きな時間に制限なく録音できると言う利点がある。スタジオ内は外部雑音がなく、演奏



に集中できるが、常に同じ状態の音にするには、エンジニアの多大な協力が必要である。

ホールでの録音が安易であるからと言っても、そのための録音機器の施設とホールの選択、スケジュール等に問題はある。

自由な時間での録音は日本ではできない。外部雑音・ホールノイズ等でピアニストの集中力を欠くこともある。空調（冷暖房）を入れたまま録音できる程にノイズを押えてある所はない。本番開始とともに空調を切らなければならない。これによってピアニストに負担がかかることは当然で、それ以上にピアノの音の状態も変化してくることが欠点である。気候的には春と秋が望ましいが、音響的には乾燥した冬が良いのである。

ピアノ録音の実際

メイン・マイクにはノイマンのM-269のペアマイク、響板・弦の響にA K GのC-451、残響収録にノイマンのSM-69を使用した。

M-269は真空管式の古いマイクロフォンであるが、粒立ちの良い暖かな音色を持った多目的マイクで弦楽器等にも良く使用したりする。それに最大の利点は、パワーサプライ側でマイクの指向性を無段階に無指向から双指向に変えられることであり、これがペアマイクの近接効果による低音の増大、解像力の微調整ができ、音質調整に最大のメリットをあたえているのである。

M-269はほとんど間隔をもたせずに、マイクの指向軸を高音と低音に、平行よりもやや開いた感じでピアノ中央上方に位置させた。マイクの指向性は単一と双指向の中間位に止めてあるが、音を聞きながら調整してゆく。ピアノの音像の大きさもマイクの間隔で調整できるが、この他に調整卓のバンポットを利用しても調整できるが、私はこの方法をとらない。

C-451は明解な音質で弦の響・倍音を収録するのに最適



で、指向軸が筒状の上方にあることが、マイクをピアノの弦に近ずけることに有利なのである。

C-451は単一指向性で間隔を50cm離して、響板に向けて近接させ、低音をカットしてミックスする。この量は音楽内容によって変化させている。又ピアニストの音量・ヴォリューム感によっても変化させている。このマイクを上げることによって華やかな音色になるが、和音のフォルティシモでは上げ過ぎることによって濁ってしまうので注意した。

SM-69はMS方式のワンポイント・ステレオ・マイクで、2本以上のマイクをホール内に立てるよりも響の混濁がなく、メイン・マイクとミックスした時に自然の広がりや響が得られるので好んで使用している。

SM-69はピアノとの距離を10m程度にして、ピアノ高音部のフラッターのない位置に置き、その位置はホール状態によってさまざまであるが、傾向として後方に行く程フラッターが多く、その点で問題があればピアノとの距離を縮めてもその部分はさけている。又自由にマイクが置ける良いホールであれば、メイン・マイクとの響と音量の加減を聞いて、曲想に合わせてスケール感を調整すれば最良である。

しかしながら、これらのマルチ思考のマイク・セッティングは、どのようなホールの状態でも良好な結果を生むためのもので、最良の方法ではない。できれば響の良い、混濁のない、良い状態のピアノが設置されている固定の場所・ホールで録音できれば、2本のマイクで十分な録音が可能なのである。かえって素直な混濁のないピアノ音楽が表現できるのではないと思われる。

重要なもう一点。ピアニスト・調律師・ディレクター・エンジニアの意志が同方向に向くためには、テスト録音のプレイバックの時に確認・修正して、録音についての不安をぬぐいさって演奏に集中できる状態にしなければならない。そのためにモニタールームの音場を把握していなければならない。ホールの場合は楽屋が多く、音響的にほとんど処理されていない、室の響と周波数特性がモニターするに適さないブミーな室が多い。そのために、吸音用カーペットと衝立を使用し、モニター系にイコライザーを入れて一応聞き易い状態にするが、低音の響だけは簡単な方法では処理できないので、エンジニアの頭の中で計算し勘案して、ピアノの音のイメージを造っている。又その時のモニターする音量によって高低のバランスが変化するので、聞きなれた音量で、楽器の自然な音量でモニターする。



1/2インチ マスター・テープ(今回使用分)
1/4インチ マスター・テープ(通常)
の比較写真

録音機器とピアノ

ピアノの製造社が変わると音色も変わると同様、その製造社の特色を出すためにマイク・ポジションも多少変化する。それ以上にマイクの種類によって大きく変化してしまうのである。又それをミックスする調整卓、録音するテープレコーダーによって、その総合で音質が決定されるのであるが、これらも一概に断定できるものではなく、エンジニアとディレクターの嗜好と長い経験により決定してゆくものである。

今回の録音に使用された機器は、現存するものの中で最良と信ずるものを使用した。ノイマンのマイクロフォン、調整卓はスチューダ 089、テープレコーダーはアンペックス ATR102のハーフインチである。ハーフインチ2チャンネル76cm/secは、S/Nの点ではデジタルに負けるが、音質に関しては、音色・艶余裕・広がり度で優位に立っている。使用したテープはアンペックスの456である。これは38cm/secではヒスの雑音分布が耳につき易い周波数で難はあるが、76cm/secにすることによって倍の周波数になり、456の特長であるダイナミックレンジの広さが生かせるのである。

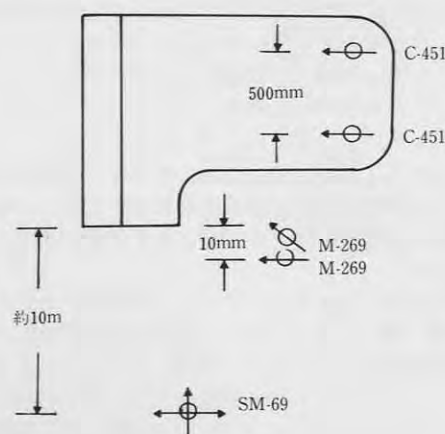
録音レベルはその機器の性能とテープの限界を知って決定されるが、ピアノは特にゴーストにも留意しなければならない。テープヒスとゴーストと歪の兼合が、その録音レベルを決定する。ノイズリダクションを使用しヒス・ゴー

ストを軽減する方法もあるが、それ以前にノイズリダクションを使用することに於いての音質劣化・変化が大きいためピアノには特に使用しない。

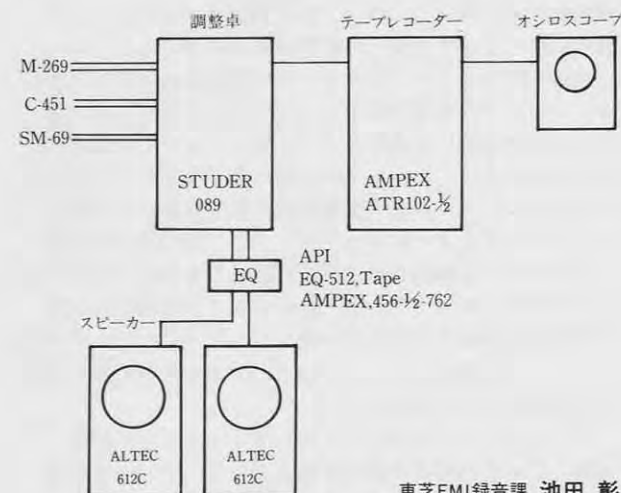
録音の目的

私達が何故このように些細なことに留意して、それを重大なことを伝えるごとく言わなければならないのか、それは音楽と言う大前提があるからで、音楽を伝える手段として最良の方法としての録音を目指しているからである。音楽を生演奏で楽しめれば良いが、色々な条件が附加され、その演奏そのものが悪い場合もある。レコードは完全であると言う発想から、良い演奏を伝えたいと望むのである。音楽の音の中に含まれている微細なニュアンスも伝えたいと思うのである。

マイク・セッティング



録音ダイアグラム



東芝EMI録音課 池田 彰

(尚、ピアノのペダル操作によるノイズが聞えますのでご了承ください)



■ DAMハイクオリティ・レコードについて

最近のデジタル・オーディオ技術とその周辺技術の急速な進歩で、ビデオ・ディスク及びコンパクト・ディスク(CD)の開発技術によって得られた製盤の技術とノウハウを最大限に駆使し、従来のマスプロ的仕様とは性格の異なる、手作りのプロセスを経て制作されたものが今回のDAMレコードであります。

オーディオ・マニア諸氏はもちろんのこと、音楽ファンの皆様も年2回企画されているDAMレコードについては、常に新しい試みがなされ、前向きな姿勢で技術的テクニックとそのトーン・キャラクターを追求し、より忠実な音楽の再現を制作ポリシーとしている意図を理解していただいていることと思います。

そこで今回のハイクオリティ・レコードの特徴を述べてみます。

レコード(フラット・ディスク)形状

一般レコード形状は、音溝部を保護する為にレーベル部とレコード周縁部にグルーブガードをほどこして、音溝部が直接に接触しない様に厚くなっております。これが一方では、レコード再生条件や音質への影響を考慮した場合必ずしも望ましい形状では無いようです。

例えばa)グルーブガードの傾斜している溝部に再生針先が正規な溝壁面接触しないままトレースする為に、異状音の発生やノイズの発生原因となります。b)ピックアップを下す時ヘタをすると、針先が滑って音溝部までジャンプする事もありキズの原因となります。c)ピックアップによっては、カートリッジの底がグルーブガードに接触することもあります。d)音質への影響としては、断面形状から解るように、ターンテーブル・シートと音溝部の密着性が悪くなり、レコード個有共振を起こしやすい状態にあると云えます。

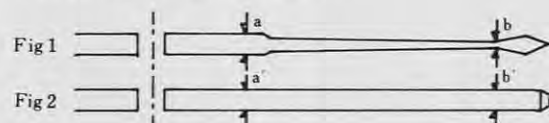


Fig 1 一般のレコード a-b=0.6(mm)

Fig 2 新フラットレコード(ディスク) a'-b'=0.2(mm)

御存知のようにステレオ音溝は、水平振幅は左右信号の和(L+R)、上下振幅は左右信号の差(L-R)として録音カッティングされており、特に本レコードのように通常のレコードより+5dB程もハイレベルでカッティングされた複雑な音溝の再生は、より以上のカートリッジの振動エネルギーでレコード盤を烈振させ、レコードの個有共振によって音質への影響が十分に考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの個有共振はレコードを厚く重くすることでマス成分を増して共振を下げ、更にレコード平面均一性の精度を上げ、フラット面に形状変更することでターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、共振によるレコードとターンテーブル・マットとの間に起こるリアクションを緩和させる事を可能にしました。これにより今までに無いサウンド・キャラクターが得られ、特に中域から低域の分解能を一段とクリアーにして、そのナチュラルな響きはよりオリジナル・サウンドに近いものと確信しております。

ターンテーブル及びターンテーブル・マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状

質量によっても音質へ影響するファクターは充分考えられますが、今回のこのレコードは特に再生条件を考慮した上で新フラットプロフィールを採用致しました。

一般レコードとの比較

重量比	30%up
厚さ比 最厚部	15%up
最薄部	65%up

更に偏心の要因の1つであるセンターホールとプレーヤーのセンターピンとのガタについて注目し、先ず市販プレーヤーのセンターピン寸法を調査してその結果でレコードのセンターホールの設計変更を行い、最小限ガタツキを減らす為にセンターホールの径を小さい方向に持って行きました。

■ クォーツ・ロック、厚手レコードについて

従来のシンクロナス・ダイレクト・モーターによる大振幅のカッティングでは、動的ワウ・フラッター(ダイナミック・ワウ)が少なからず音質に影響を及ぼしますが、今回の“DAM45”では、高精度にサーボされたクォーツ・ロックD.D.モーターとダイヤモンド・カッター針を採用することで、ディスク・マスタリング時に於けるクォリティーを高め、以前にまして余裕のある音溝巾と大振幅にたえられ、たっぷりとしたピッチとディプスがコントロールされるようになりました。

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とDレンジ、Fレンジ、及びリニアリティ等、大幅に飛躍しています。振幅(P-P)250μ~280μ、[L-R]、ピーク・レベル+20dB程度のものは数多く高密度レコード化しております。このような高密度レコードの溝波形を完全にトレースする為に再生時の技術的ノウハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かすかずのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェル、トーン・アームやターンテーブル・シートの共振問題等々……。たとえば、ターンテーブル・シートを例にとっても、ゴム、なめし皮、ガラス、金属等、変える毎にその音質の変化は確実に差があります。このように再生時の高忠実トレースはさまざまな問題が残されています。

それでは、ディスクそのものはどうかと考えますと、一時期、薄いレコードはプレスでの塩ビ成形性が良いとされ話題になりましたが、レコードを厚くする(質量を増す)ことでレコードの共振を下げ、更に再生時のレコードとターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音低域の分解能が一段とクリアーになり、特に深みの有る、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感を充分にお楽しみ下さい。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来からのプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれ、リアリティの良いダイナミック・レンジをもつオリジナル・サウンドの再現を可能にしました。

30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードと変った点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

- (1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ませんが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取り扱い下さい。
- (2)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33 $\frac{1}{3}$ 回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意をして下さい。
- (3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃~20℃位に保って下さい。
- (4)再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。
- (5)このレコードは、ハイクオリティーのオーディオ・チェック・レコードのため、カートリッジによってはトレースがむずかしい場合があります。

レコード材質——プロユース材料使用

■カッティング・データ

Cutting Date: 26 April 1984

Toshiba-EMI Akasaka

Tape Recorder: AMPEX ATR-102- $\frac{1}{2}$

Drive Amplifier: Neumann SAL-74

Cutting Lathe: Neumann VMS-80

Diamond Cutting Stylus

Cutting Head: Neumann SX-74

Non Limiter

Non Equalizer

■スタッフ

プロデューサー	鈴木武昭
プロデューサー/ディレクター	伊藤玲子
バランス・エンジニア	池田 彰
ピアノ・チューナー	鶴田昭弘
カッティング・エンジニア	竹内昭吾
メカニック・エンジニア	金子秀作
ジャケット	東芝EMI(株)デザイン室
カメラ	GUY CROEGAERT (ギイ・クルガル)
制作協力	松尾楽器商会 神原音楽事務所
録音協力	サウンド・クリエイター
録音場所	茅ヶ崎市民文化会館大ホール S.59.3 14.
使用ピアノ	スタインウェイ フルコンサート
企画・制作	第一家庭電器DAM
製造	東芝EMI株式会社